高　等　学　校

平成 31 年度(2019 年度)

教育研究員研究報告書

国　語

東京都教育委員会

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由 ･････････････････････････････････ 1

Ⅱ　研究の視点 ･･･ 2

Ⅲ　研究仮説 ･･ 3

Ⅳ　研究方法 ･･ 3

Ⅴ　研究内容 ･･ 5

Ⅵ　研究の成果 ･･ 14

Ⅶ　今後の課題 ･･ 16

研究主題	生徒の思いや考えを広げたり深めたりするための 言語活動の工夫と学習評価の充実

Ⅰ　研究主題設定の理由

１　学習指導要領改訂

平成 30 年３月に告示された高等学校学習指導要領（以下、「新しい高等学校学習指導要領」と表記。）においては、全教科・科目等において、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で育成を目指す資質・能力を整理して示すとともに、「主体的・対話的で深い学び」の視点に基づく授業改善を求めている。また、学校全体として、生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育内容や時間の配分、必要な人的・物的な体制の確保、教育課程の実施状況に基づく改善などを通して、教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントに努めることが求められている。これらを受け、今年度の教育研究員は、全体テーマを「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」とするとともに、高等学校の各部会の共通テーマを「学校の教育活動全体を通して育成すべき『資質・能力』を育むための授業改善と学習評価の充実」とし、研究を進めてきた。

新しい高等学校学習指導要領では、国語においては科目構成の大幅な変更など大規模な改訂が行われている。高等学校国語の指導については、教材に依存した読むことに偏った指導が行われていると指摘されており、その改善を図るねらいがある。平成 28 年 12 月に示された中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」では、高等学校における国語科の課題について以下のように示されている。

○　教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある。また、文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること、多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること、国語の語彙の構造や特徴を理解すること、古典に対する学習意欲が低いことなどが課題となっている。

○　教材の読み取りが指導の中心となることが多く、国語による主体的な表現等が重視された授業が十分に行われていないこと、話合いや論述などの「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域の学習が十分に行われていないこと、古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないことなどが課題として指摘されている。

これらの課題を踏まえ、今回の改訂では、各領域の授業時数が具体的に示されている。例えば、必履修科目である「現代の国語」と「言語文化」の２科目における各領域に授業時数は、「話すこと・聞くこと」が 20～30 時間、「書くこと」が 35～50 時間、「読むこと」が 70～85 時間と示されており、１／２程度の時間を「読むこと」に充て、「話すこと・聞くこと」「書くこと」とのバランスを取りながら指導計画を立てることを求めている。

本研究では、こうした学習指導要領改訂の趣旨を踏まえた授業改善に資する研究を目指すこととした。

２　生徒の現状と国語科の指導上の課題

研究主題を定めるに当たり、生徒の現状について協議を行った。各部員は、所属校において、話合いなど対話的な学びの視点による授業改善を行っているが、協議を通じて、次のような生徒の現状が提示された。

【生徒の現状】

①　文章を読んで理解したことなどに基づいて、自分の考えを形成することはできているが、対話を通じて自分の思いや考えを広げたり深めたりすることは十分にできていない。

②　学習活動における対話は成立しているが、自分の思いや考えを根拠に基づき言葉で的確に表現する力は十分に身に付いていない。

また、基礎研究として、全国学力・学習状況調査や東京都教育委員会が実施する「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の結果などについても検証した。

「平成 30 年度全国学力・学習状況調査報告書（中学校国語）」では、各領域の「指導改善のポイント」として、

○　目的や場面に応じて的確に話したり聞いたりする指導の工夫

○　目的や意図に応じて相手に分かりやすく書く指導の工夫

○　目的に応じて読み、内容を的確に捉える指導の工夫

の３点を挙げている。いずれも、言語活動の充実を図る際に、活動の目的を明確にすることの重要性を示している。

これらを踏まえ、本研究においては、各領域の指導における言語活動の目的や目標を明確化することを重視するものとし、次のような指導上の課題を設定することとした。

【国語科における指導上の課題】

①　生徒自身が積極的に考えを広げたり深めたりできる課題を設定し、伝え合う指導をする必要がある。

②　言葉で自分の思いや考えを深める力を身に付けることの見通しと振り返りができるよう、明確な目標と評価が必要である。

３　主題設定の理由

上記の生徒の現状と指導上の課題を踏まえながら、生徒の言葉によるものの見方、感じ方、考え方を深める資質・能力を向上させるために、どのように言語活動を工夫するのかという視点に立ち、研究主題を「生徒の思いや考えを広げたり深めたりするための言語活動の工夫と学習評価の充実」として、研究を進めた。

Ⅱ　研究の視点

１　研究の着眼点

本研究では、学習指導要領改訂の趣旨や生徒の現状等を踏まえ、指導の中心となる「読むこと」に加えて、「書くこと」の指導において、言葉で自分の思いや考えを深め、他者との関わりの中で知識及び技能の定着を図るとともに、生徒が新たな視点を取り入れ自分の考えを構築する力の育成を図る指導の実現を目指して、次の着眼点をもって言語活動の工夫及び評

価の充実を図ることとした。

① 生徒にとって身近な課題を解決する指導の工夫

② 資質・能力を効果的に身に付けることができる指導と評価の工夫

2 言語活動の工夫

言葉で自分の思いや考えを深め、他者との関わりの中で知識及び技能の定着を図るとともに、生徒が新たな視点を取り入れ自分の考えを構築する力の育成を目指すため、対話を中心とした言語活動の工夫に取り組むこととし、前述の指導上の課題を踏まえ、話合い活動における課題設定の工夫について研究を行うこととした。

3 評価の充実

指導上の課題や研究主題を踏まえ、次のような視点で学習評価の充実を図ることとした。

○ 目的や目標を明確化し、見通しをもつとともに振り返ってメタ認知できるよう自己評価を行う。

○ 学習を通じて変容する思考の過程を可視化できるよう教材を工夫する。

Ⅲ 研究仮説

「Ⅱ 研究の視点」を踏まえ、本研究における仮説を次のように設定した。

1 生徒にとって身近で取り組む必然性のある課題を設定し言語活動を行うことで、生徒の、文章を読んで理解したことなどに基づくものの見方、感じ方、考え方を深めることができる。

2 思考の過程を可視化できるよう教材を工夫し、自分の思考を振り返らせることで、身に付けさせたい資質・能力を効果的に育成することができる。

Ⅳ 研究方法

1 具体的方策

本研究の仮説を検証するために、以下のような学習活動を設定し、生徒の変容を分析する。

① 身近で取り組む必然性のある課題を設定し、話合い活動に取り組ませる。

② 思考の変容を「ワークシート」に記入させ可視化し、自己評価を行う。

2 検証方法

以下の方法で、生徒の変容を分析し、本研究の仮説を検証する。

① 授業の事前・事後でアンケートを取り、検証する。

② 言語活動による思考の過程と、適切に言葉で表現する力や使用する語句の変化が読み取れる「ワークシート」を活用し、生徒の思考の広がりや深まりを検証する。

研究構想図

全体テーマ　「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」

高校部会テーマ
「学校の教育活動全体を通して育成すべき『資質・能力』を育むための授業改善と学習評価の充実」

各教科等における「資質・能力」について
【知識及び技能】
自己と他者の相互理解を深めるために言葉の特徴や役割を理解し適切に表現する力
【思考力、判断力、表現力等】
言葉を通して相互伝達、相互理解を進め、創造的・論理的に思考したり豊かに想像したりする力
【学びに向かう力、人間性等】
言葉のもつ価値への認識を深め、言語感覚を磨き、言語能力を高めていこうとする態度

高校部会テーマにおける各教科等の【現状】と【課題】と【テーマ設定のための着眼点】
【現状】
①文章を読んで理解したことなどに基づいて、自分の考えを形成することはできるが、対話を通じて自分の思いや考えを広げたり深めたりすることは十分にできていない。
②学習活動における対話は成立しているが、自分の思いや考えを根拠に基づき言葉で的確に表現する力は十分に身に付いていない。
【課題】
①生徒自身が積極的に考えを広げたり深めたりできる課題を設定し、伝え合う指導をする必要がある。
②言葉で自分の思いや考えを深める力を身に付けることの見通しと振り返りができるよう、明確な目標と評価が必要である。
【テーマ設定のための着眼点】
①生徒にとって身近な課題を解決する指導の工夫
②資質・能力を効果的に身に付けることができる指導と評価の工夫

高等学校国語部会主題

生徒の思いや考えを広げたり深めたりするための言語活動の工夫と学習評価の充実

仮　説
①生徒にとって身近で取り組む必然性のある課題を設定し言語活動を行うことで、生徒の、文章を読んで理解したことなどに基づくものの見方、感じ方、考え方を深めることができる。
②思考の過程を可視化できるよう教材を工夫し、自分の思考を振り返らせることで、身に付けさせたい資質・能力を効果的に育成することができる。

具体的方策
①身近で取り組む必然性のある課題を設定し、話合い活動に取り組ませる。
②思考の変容を「ワークシート」に記入させて可視化し、自己評価を行う。

検証方法
①検証授業の事前・事後でアンケートを取り、生徒の変容を検証する。
②話合いの前と後で、適切に言葉で表現する力や使用する語句の変化が読み取れる「ワークシート」を活用し、生徒の思考の変容を検証する。

Ⅴ　研究内容

○　実践事例１

教科名	国語	科目名	国語総合 （言語文化）	学年	第１学年

(1)　学校の目標

ア　生徒一人一人の可能性を見付け伸ばし、知恵と勇気をもって人生の難関を乗り越えていく自信と力を培う。

イ　他人を思いやり、使命感をもって、積極的に社会に貢献できる人間を育成する。

ウ　生涯を通して、健康で活力のある生活を送る基礎となる健やかな心と身体をつくる。

(2)　教科・科目の目標（「言語文化」の目標）

ア　生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。

イ　論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

ウ　言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

(3)　単元の目標

ア　文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解する。　（知識及び技能）（１）エ

イ　作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深める。
（思考力、判断力、表現力等）Ｂ（１）オ

ウ　言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。　（学びに向かう力、人間性等）

(4)　単元名、使用教材（教科書、副教材）

ア　単元名　　作品の解釈を通して自分の考え方を広げたり深めたりする

イ　使用教材　　「羅生門」（芥川龍之介）〔教科書掲載教材〕

(5)　単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。（（１）エ）	「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めている。（Ｂ（１）オ）	粘り強く、作品に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、他者との対話を通して、自分の考えを広げたり深めたりしようとしている。

(6)　研究と教材の関連

義務教育を終え、高校生となった生徒たちは、人間としての在り方や生き方を深く考える時期にある。近代小説の代表作の一つである「羅生門」は、作品に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈するに当たり、他者との対話を通して自分の考えを広げたり深めたりすることにふさわしいと考える。

(7)　単元の指導と評価の計画（５時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準（評価方法など）
		ア	イ	ウ	
第１時	・作品や作者について知る。 ・背景知識、登場人物を確認する。 ・単元の目標を理解し、学習の見通しをもつ。 ・第一段落を読み、場面設定や登場人物の状況を読み取る。	●			ア（記述の分析《ノート》）
第２時	・第二段落を読み、下人の状況を読み取る。 ・「盗人になる勇気」について考える。		●		イ（行動の分析《話合い》）
第３時	・第三・四段落を読み取り、①下人の判断②下人の心情の変化③比喩表現の変化に着目して読解を深める。		●		イ（記述の分析《テストによる理解度の把握》）
第４時	・第五段落を読み取り、老婆の主張を理解する。 ・「老婆の主張」の核心を理解する。			●	ウ（行動の分析《話合い》・記述の分析《ノート》）
第５時（本時）	・第五・六段落を読み、羅生門の楼上で体験した出来事を経た下人の心情の変容を理解する。			●	ウ（行動の分析《話合い》・記述の分析《ワークシート》）

(8)　本時（全５時間中の５時間目）

ア　本時の目標

下人が老婆の着物を剥(は)ぎ取った理由について、話合いによる考察を通じて、自分の最初の解答と話合い後の解答の違いを比較し、作品への理解を深める。

イ　仮説に基づく本時のねらい

本文中の根拠を示しながら対話的に解答を作り上げることで、作品への理解を深め、自分自身の在り方生き方を考えるという身近な課題になると考えて設定した。「ワークシート」で、解答の要素と根拠が増えていく様子や最初と最終の解答の違いを振り返ることで、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めることができたかを確認し、把握する。

ウ　本時の展開

	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	・本日の目標と課題を確認する。 ・下人の行動の理由を考え、作品に対する解釈を深める。 下人が老婆の着物を剥ぎ取った理由を考察する。 ・前時に学習した「老婆の主張」を振り返る。	・前時の課題をチェックし、生徒の理解度を把握する。 ・老婆の論理を生徒の発言により確認する。	イ（発言の分析《発問》・《ノート》）
展開	・下人が老婆の着物を剥ぎ取った理由を考えるために必要な要素を付せんに書く。 ・４人一組の班になり、模造紙に付せんを貼り付けながら分類する。 ・教科書本文を確認し、追加要素を付せんに記入し、模造紙に分類して加える。 ・考えた要素をグループごとに発表する。	・生徒の理解レベルを確認して、最適な要素を提示できるよう助言する。 ・分類する理由を班で確認しながら行うよう助言する。	ウ（行動の分析《話合いを録画する》・記述の分析《ワークシート》）
まとめ	・発表された要素を基に、下人が老婆の着物を剥ぎ取った理由をワークシートに記入する。 ・本時の振り返りと自己評価を行う。	・第一稿と最終稿を比較させ、変容を確認させる。	ウ（記述の分析《ワークシート》）

(9)　本時の振り返り

ア　本校の教育目標との関連について

本校の目標の一つに、「知恵と勇気をもって人生の難関を乗り越えていく自信と力を培う」とある。人生の難関を乗り越えようと、老婆との対話を通じて試行錯誤する下人の心情を言葉で客観的に捉えることができた。人生の難関に突き当たったときに自分の心理状態を振り返り、よりよい判断をしようとする姿勢にもつながると考える。

イ　課題設定について

作品を読んだ生徒にとって、身近で取り組む必然性のある課題として、身に付けた力（作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈できる）を用いて考える（下人が老婆の着物を剥ぎ取った理由を考察する）という課題を設定した。話し合う前の第一稿では、ほとんどの生徒が「老婆の論理」以降の下人の言葉に注目していたが、話合いにより、老婆の着物を剥ぎ取るという下人の行為には、「老婆の論理」や下人を取り巻く状況が影響を与えていることを理解し、文章によって表現できるようになった。

ウ　「ワークシート」について

本単元で使用した「ワークシート」（図１）とともに、生徒の自己評価のために評価規準を細分化したチェックシート（図２）を作成した。これらを基に、思考の過程を１枚の「ワークシート」で比較し、自分の身に付けた資質・能力を振り返ることができた。

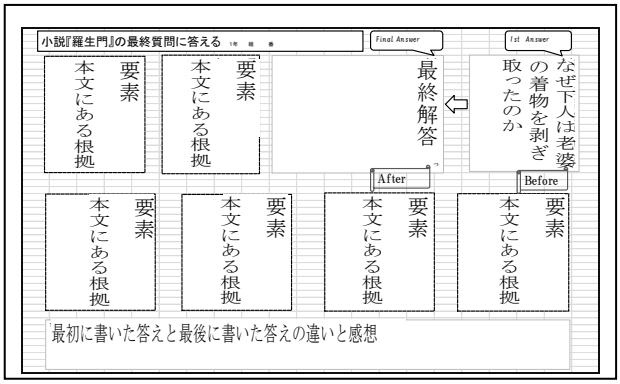
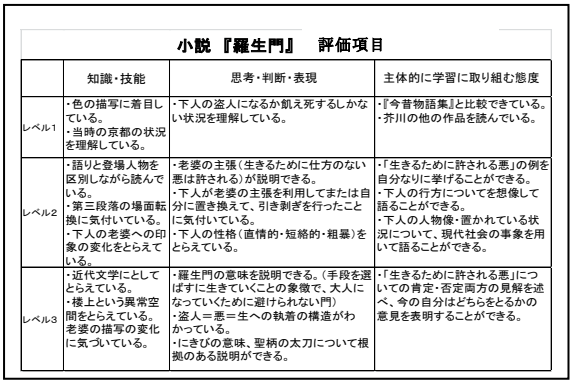


図１



小説『羅生門』　評価項目

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
レベル1	・色の描写に着目している。 ・当時の京都の状況を理解している。	・下人の盗人になるか飢え死するしかない状況を理解している。	・『今昔物語集』と比較できている。 ・芥川の他の作品を読んでいる。
レベル2	・語りと登場人物を区別しながら読んでいる。 ・第三段落の場面転換に気付いている。 ・下人の老婆への印象の変化をとらえている。	・老婆の主張（生きるために仕方のない悪は許される）が説明できる。 ・下人が老婆の主張を利用してまたは自分に置き換えて、引き剥ぎを行ったことに気付いている。 ・下人の性格（直情的・短絡的・粗暴）をとらえている。	・「生きるために許される悪」の例を自分なりに挙げることができる。 ・下人の行方についてを想像して語ることができる。 ・下人の人物像・置かれている状況について、現代社会の事象を用いて語ることができる。
レベル3	・近代文学にとしてとらえている。 ・楼上という異常空間をとらえている。 老婆の描写の変化に気づいている。	・羅生門の意味を説明できる。（手段を選ばずに生きていくことの象徴で、大人になっていくために避けられない門） ・盗人＝悪＝生への執着の構造がわかっている。 ・にきびの意味、聖柄の太刀について根拠のある説明ができる。	・「生きるために許される悪」についての肯定・否定両方の見解を述べ、今の自分はどちらをとるかの意見を表明することができる。

図２

エ　アンケートの結果について

「①話合いによって授業の内容をより深く考えられる」が 17 ポイント、「②話合いによって新たな考えや解決策が生まれる」が８ポイント増加した。課題により、考えを広げたり深めたりしたことが分かる。一方、「③話合いによって新しい知識を手に入れられる」が４ポイント、「④話合いの中で他人の意見を聞くことで、自分の考えが変わったり深まったりする」が 14 ポイント減少した。「ワークシート」に記入した内容を解答に生かしきれなかったためと考え、本研究の課題となった。

表１　検証授業前後のアンケート結果の比較

	思う		やや思う		あまり思わない		思わない		肯定的な回答
	前	後	前	後	前	後	前	後	
①	11%	20%	39%	47%	44%	20%	6%	13%	17p
②	17%	13%	55%	67%	22%	7%	6%	13%	8p
③	17%	7%	61%	67%	17%	13%	6%	13%	−4p
④	17%	20%	44%	27%	17%	33%	22%	20%	−14p

①話合いによって授業の内容をより深く考えられると思う
②話合いによって新たな考えや解決策が生まれると思う
③話合いによって新しい知識を手に入れられると思う
④話合いの中で他人の意見を聞くことで、自分の考えが変わったり深まったりすると思う

○実践事例２

教科名	国語	科目名	国語表現 （国語表現）	学年	第２、４学年

(1)　学校の目標

ア　「生きる力」を育むために必要な基礎学力の確実な定着を図る。

イ　自らの個性・適性を伸ばしつつ、社会の一員としての生き方を考え、主体的に自己実現を図る。

(2)　教科・科目の目標（「国語表現」の目標）

ア　実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。　（知識及び技能）

イ　論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、実社会における他者との多様な関わりの中で伝え合う力を高め、自分の想いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。　（思考力、判断力、表現力等）

ウ　言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。　（学びに向かう力、人間性等）

(3)　単元の目標

ア　話し言葉と書き言葉の特徴や役割、表現の特色について理解を深め、伝え合う目的や場面、相手、手段に応じた適切な表現や言葉遣いを理解し、使い分ける。

（知識及び技能）（１）イ

イ　読み手に対して自分の思いや考えが効果的に伝わるように書かれているかなどを吟味して、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりする。　（思考力、判断力、表現力等）Ｂ（１）カ

ウ　言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。　（学びに向かう力、人間性等）

(4)　単元名、使用教材（教科書、副教材）

ア　単元名　　悩み相談への回答の推敲を通して自分の考え方を広げたり深めたりする。

イ　使用教材　悩み相談〔新聞からの引用〕

(5)　単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
話し言葉と書き言葉の特徴や役割、表現の特色について理解を深め、伝え合う目的や場面、相手、手段に応じた適切な表現や言葉遣いを理解し、使い分けている。（（１）イ）	「書くこと」において、読み手に対して自分の思いや考えが効果的に伝わるように書かれているかなどを吟味して、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりしている。（Ｂ（１）カ）	粘り強く読み手の共感が得られるよう文章の構成や展開を工夫し、学習課題に沿って話し合い、自分の意見をまとめようとしている。

(6)　研究と教材の関連

新聞に掲載された「学校で友人に話を合わせている自分が好きではない」という同世代の悩み相談を教材とした。第２学年、第４学年の生徒にとっては、自分の体験と照らし合わせて考えることのできる身近な教材といえる。専門の編集者によって練られた回

答の構成を参考にしたり、互いの回答について感想や意見を述べ合ったりすることで、他者の視点を取り入れて自分の回答をよりよいものにまとめていく言語活動を通じて、生徒の考えを広げたり深めたりすることができると考え、教材とした。

(7)　単元の指導と評価の計画（３時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準（評価方法など）
		ア	イ	ウ	
第1時	「学校で友人に話を合わせている自分が好きではない」という悩み相談に対して、適切な回答を書く。 ・手本となる回答の構成を確認し、内容を４項目に分ける。 ・悩み相談について、項目ごとの回答を書く。	●			ア（記述の分析《ワークシート》、行動の観察）
第2時（本時）	・各自が取り組んだ項目ごとの回答を班で共有する。 ・班で話し合い、回答文の案を作る。 ・最終的な回答文を各自で書く。		●		イ（記述の分析《ワークシート》、行動の観察）
第3時	・前時に作成した回答文を共有し、相互評価を行う。 ・学習の振り返りを行う。			●	ウ（記述の分析《ワークシート》、行動の観察）

(8)　本時（全３時間中の２時間目）

ア　本時の目標

読み手に対して自分の思いや考えが効果的に伝わるよう文章の構成や内容について推敲し再構成することを通じて、自分の思いや考えを広げたり深めたりする。

イ　仮説に基づく本時のねらい

学校に関する悩み相談とその回答という身近な課題を設定した。学習過程を「ワークシート」（図４）に記録して可視化し、事後の振り返りと自己評価を通じて思考の変容を確認することで、読み手からの助言などを踏まえて自分の文章を吟味し、特長や課題を捉え直す力が身に付いたか把握する。

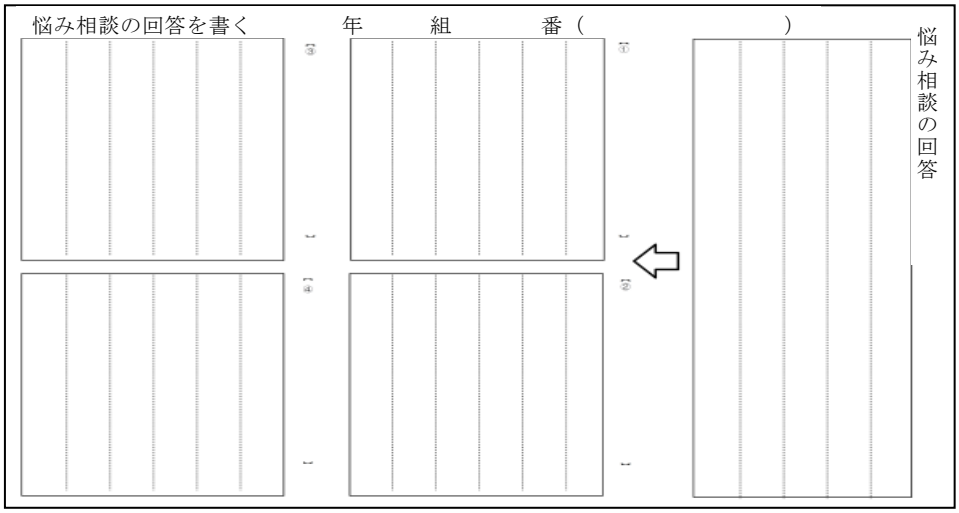


図４

ウ　本時の展開

	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	・本時の目標と学習内容を確認する。	・学習の流れと目的を伝える。	
展開	・各自が書いた項目ごとの回答を、班で共有する。 ・班で話し合いながら、悩み相談の回答の案を作る。 ・話合いを基に構成要素の加筆、修正をする。 ・最終的な回答文を書く。	・相談内容の整理、共感、解決策、励ましという項目ごとに出し合うよう指示する。 ・適切な表現や言葉遣い、具体例の配置と文章全体の構成や展開に留意して書くよう指示する。	イ（記述の分析《ワークシート》、行動の観察）
まとめ	・回答文を評価する。	・回答文を自己評価させる。	

(9)　本時の振り返り

ア　本校の教育目標との関連について

言葉を用いて自分の思いや考えを的確に伝える力は、本校の教育目標にある「『生きる力』を育むために必要な基礎学力の確実な定着」につながり、よりよく伝えようとすることで「自らの個性・適性を伸ばしつつ、社会の一員としての生き方を考え」ることにつながるものと考える。

イ　課題設定について

身近で取り組む必然性のある課題として、新聞記事からの引用による教材を作成し、「適切な回答を書く」という課題を設定した。その結果、悩みに対する感想のような回答から、読み手を思いやりながら解決策を示す回答へと変容した。

ウ　「ワークシート」について

実践事例１で「ワークシート」の内容を解答に生かしきれなかったことを踏まえ、話合いで書き込んだ内容を並べ替えて構成を検討できる形式とした。推敲後の記述は言葉遣い、構成等に大きな変化が見られ、生徒は身に付けた資質・能力を確認することができた。

エ　アンケートの結果について

③を除く項目で肯定的な回答が増加した。特に、「①話合いによって授業の内容をより深く考えられると思う」は 36 ポイント増加し、推こう後は記述量も増え構成の工夫も見られるなど、ねらいどおりの資質・能力を身に付けることができたと言える。「③話合いによって新しい知識を手に入れられると思う」が変化しなかったのは、課題が推こうだったこと、「ワークシート」に自分と他者の考えを分けずに記入したことが原因と思われ、本研究の課題となった。

表２　検証授業前後のアンケート結果の比較

	思う		やや思う		あまり思わない		思わない		肯定的な回答
	前	後	前	後	前	後	前	後	
①	27%	73%	36%	27%	18%	0%	18%	0%	36ｐ
②	27%	58%	55%	42%	9%	0%	9%	0%	18ｐ
③	36%	55%	46%	27%	9%	18%	9%	0%	0ｐ
④	27%	64%	55%	36%	18%	0%	0%	0%	18ｐ

①話合いによって授業の内容をより深く考えられると思う
②話合いによって新たな考えや解決策が生まれると思う
③話合いによって新しい知識を手に入れられると思う
④話合いの中で他人の意見を聞くことで、自分の考えが変わったり深まったりすると思う

○実践事例３

教科名	国語	科目名	国語総合 （現代の国語）	学年	中等第４学年

(1)　学校の目標

ア　心・知・体のバランスのとれた人間力を育む教育を推進する。

イ　イノベーティヴなグローバル人材を育成する。

(2)　教科・科目の目標（「現代の国語」の目標）

ア　実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。

イ　論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

ウ　言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

(3)　単元の目標

ア　推論の仕方を理解し使う。　（知識及び技能）（２）ウ

イ　目的に応じて、文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら、内容や書き手の意図を解釈したり､文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに、自分の考えを深める。　（思考力、判断力、表現力等）Ｃイ

ウ　言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。　（学びに向かう力、人間性等）

(4)　単元名、使用教材（教科書、副教材）

ア　単元名　　評論の解釈を通して自分の考え方を広げたり深めたりする

イ　使用教材　「魔術化する科学技術」（若林幹夫）〔教科書掲載教材〕

(5)　単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
推論の仕方を理解し使っている。（（２）ウ）	「読むこと」において、目的に応じて、文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら、内容や書き手の意図を解釈したり、文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに、自分の考えを深めている。（Ｃイ）	積極的に文章や図表などに含まれている情報を相互に関連付けながら、今までの学習を生かして理解したことや解釈したことをまとめて発表し、話し合おうとしている。

(6)　研究と教材の関連

本教材は、科学評論である。文章に含まれている情報を相互に関連付けながら、内容や書き手の意図を解釈し、自分の考えを深めることができる教材である。本単元では、解釈したことを基に具体的な科学技術の問題点について推論したことを発表し、それについて話し合う言語活動を通して自分の考えを深めることができると考える。

(7)　単元の指導と評価の計画（７時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 （評価方法など）
		ア	イ	ウ	
第１時	・本文を通読し文章の構成を整理する。	●			ア（ノート）
第２時	・本文の内容を理解する。 ・科学の「不気味さ」「魔術化」の意味を理解する。	●			ア（ノート）
第３時	興味のある科学技術を例示し、本文の「魔術化」と関連させた上でその問題点について考察する。 ・日常生活における科学の「魔術」的側面を新聞記事から探し、問題解決に適する記事を選択して、推論を立てる。		●		イ（記述の分析《ワークシート》、行動の観察）
第４時	・他の班の人に意見をもらい、推論した内容を検討する。		●		イ（記述の分析《ワークシート》、行動の観察）
第５時	・推論した内容をポスターにまとめる。		●		イ（記述の分析《ワークシート》、行動の観察）
第６時（本時）	・ポスターセッションを行う。 ・質疑応答により、発表内容について話し合う。 ・自己評価を行う。		●		イ（記述の分析《発表メモ》《見学メモ》、行動の観察）
第７時	・前時の発表で気付いたことや考えたことを話し合い、単元の学習を振り返る。			●	ウ（記述の分析《振り返りシート》、行動の観察）

(8)　本時（全７時間中の６時間目）

ア　本時の目標

ポスターセッションによる質疑応答を通して、発表内容を深く理解するとともに、自分の考えを深める。

イ　仮説に基づく本時のねらい

ポスターセッションと質疑応答により、新しい知識を得るとともに読みを深めることができると考えて課題を設定した。また、「ワークシート」（図３）は自分の推論と他者の意見を記入する欄を分け、新しい知識を得たことが把握できるように作成した。

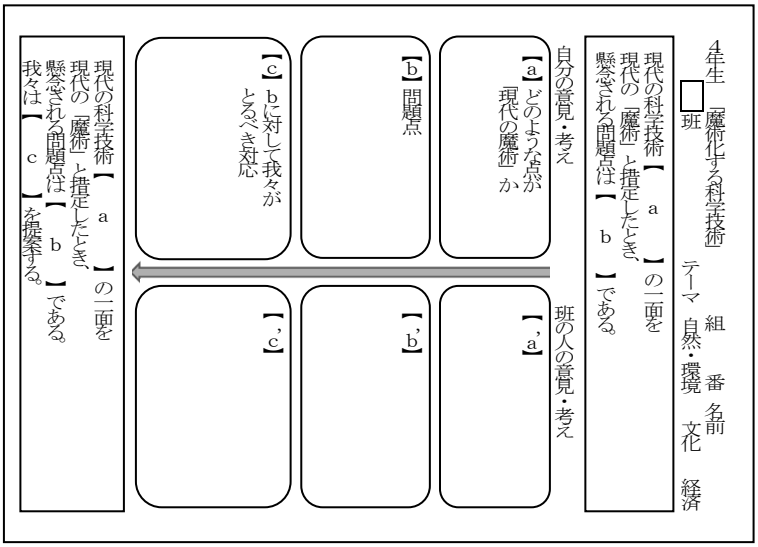


図３

ウ　本時の展開

	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	・本時の目標と学習内容を確認する。 ・発表場所へ移動・準備	・本時の流れを確認する。	
展開	・ポスターセッションを行う。 （枠内の活動を２回行う） 【７分×２回】・発表・質疑応答・移動	・活発な質疑応答になるよう必要に応じて助言する。	イ（記述の分析、行動の観察）
まとめ	・発表を聞いて自分の考えが変化した点について班で意見交流する。 ・自己評価する。 ・感想を書く。	・視野を広げるための交流であることを意識させる。 ・自分の知識や考え方が変容した経験を大切にするように助言する。	イ（行動の観察、記述の分析《振り返りシート》）

(9)　本時の振り返り

ア　本校の教育目標との関連について

本校では、「学力」「協働する力」「突破力」「探究力」をバランスよく育成することにより、「心・知・体のバランスのとれた人間力を育む教育を推進」し、「イノベーティヴなグローバル人材を育成する」ことを目指している。本単元では、読んで解釈したことを基に具体例を探して推論を立て、その推論が正しいかどうかを話し合い、自分の考えを深めていく。このような力は、他の教科等における探究的な学びの基盤的な力となると考える。

イ　課題の設定について

本文と読んだ生徒にとって、身近で取り組む必然性のある課題として、「興味のある科学技術を例示し、本文の「魔術化」と関連させた上でその問題点について考察する」という課題を設定した。生徒は新聞記事から推論を立てるのに最も適切なものを選択、整理しながら考えをまとめていくことができた。

ウ　「ワークシート」について

「ワークシート」（図３）の上段に自分の考えを、下段には他者の意見を記入するようにした。しかし、単元全体を見通した内容になっておらず、推論を立てるまでの思考の変化は分かるが、その後の深まりを十分に見取ることができなかった。

エ　アンケートの結果について

本時の直後に行ったアンケートでは、肯定的な回答はすべて減少した。科学技術そのものの問題点に焦点を当てて推論した生徒が多く、ポスターセッションの質疑応答でも読みを深められなかったためと考えられる。第７時では、教材を読み返し推論を再考したことで、内容の理解を深めることができた。生徒が興味をもって取り組める課題は設定できたが、読みを深めたり新たな知識を得たりできるようにするには、「ワークシート」とともに、工夫が必要である。

表３　検証授業前後のアンケート結果の比較

	思う		やや思う		あまり思わない		思わない		肯定的な
	前	後	前	後	前	後	前	後	回答
①	42%	57%	50%	29%	8%	14%	0%	0%	−6ｐ
②	47%	41%	50%	43%	3%	16%	0%	0%	−13ｐ
③	47%	43%	48%	49%	5%	8%	0%	0%	−3ｐ
④	50%	57%	47%	38%	3%	5%	0%	0%	−2ｐ

①話合いによって授業の内容をより深く考えられると思う
②話合いによって新たな考えや解決策が生まれると思う
③話合いによって新しい知識を手に入れられると思う
④話合いの中で他人の意見を聞くことで、自分の考えが変わったり深まったりすると思う

Ⅵ　研究の成果

１　仮説１「生徒にとって身近で取り組む必然性のある課題を設定し言語活動を行うことで、生徒の文章を読んで理解したことなどに基づくものの見方、感じ方、考え方を深めることができる。」の検証

次の表は実践事例１から３における話合い活動の事前と事後に行った「話合い活動に関する意識調査」の結果である。①から④の質問項目について検証する。

実践事例	単元	言語活動	課題の工夫	資質・能力		事前肯定	事後肯定	増減
1	作品の解釈を通して自分の考え方を広げたり深めたりする。	話合い	読み取ったことを根拠として解決していく課題	作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深める。	①	50%	67%	17p
					②	72%	80%	8p
					③	78%	74%	−4p
					④	61%	47%	−14p
2	悩み相談への回答の推こうを通して自分の考え方を広げたり深めたりする。	話合い	生徒自身の経験を反映できる課題	読み手に対して自分の思いや考えが効果的に伝わるように書かれているかなどを吟味して、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりする。	①	64%	100%	36p
					②	82%	100%	18p
					③	82%	82%	0p
					④	82%	100%	18p
3	評論の解釈を通して自分の考え方を広げたり深めたりする。	ポスターセッション	興味をもった科学技術を推論の対象とする課題	目的に応じて、文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら、内容や書き手の意図を解釈したり、文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに、自分の考えを深める。	①	92%	86%	−6p
					②	97%	84%	−13p
					③	95%	92%	−3p
					④	97%	95%	−2p

①話合いによって授業の内容をより深く考えられると思う
②話合いによって新たな考えや解決策が生まれると思う
③話合いによって新しい知識を手に入れられると思う
④話合いの中で他人の意見を聞くことで、自分の考えが変わったり深まったりすると思う

(1)　アンケート結果の分析

ア　「①話合いによって授業の内容をより深く考えられると思う」に対する生徒の肯定的な回答の変化

①に対する生徒の肯定的な回答は、実践事例１では 17 ポイント、実践事例２では 36 ポイント増加している。

実践事例１では、読み取ったことを基に自分の考えを形成し、話合いの後、再び教材を読み返し、根拠を教材から探し出して解答を作成した。話合いの中で作品全体から複数の根拠を示し合い共有したことにより、これまでの読解が作品のより深い解釈につながったことを実感できたと考えられる。実践事例２では、悩み相談に対する回答を作成した後、手本となる回答を分析し、文章の構成や展開を学んだ後に話合い、再度回答を作成した。話合いの中で、回答を構成する項目にそれぞれがどのように考えたかを共有し、意見や感想を伝え合ったことにより、自分の経験を効果的に伝えようとし、考えを深めることができたと考えられる。

一方、実践事例３では、６ポイント減少した。興味をもった科学技術を推論の対象とし、生徒は身近で必然性のある課題として取り組むことができたが、個人や班での推論を検討する時間が不足し、本文のキーワードである「魔術化」と関連付けた推論がねらいどおり

にできなかったようである。そのため、科学技術そのもののもつ問題点に推論の焦点が当たってしまい、ポスターセッションでも質疑応答による考えの深まりが十分ではなかった。

イ　「②話合いによって新たな考えや解決策が生まれると思う」に対する生徒の肯定的な回答の変化

実践事例１では８ポイント、実践事例２では 18 ポイント増加した。実践事例１では、教材からの根拠を示し合ったことで、新たな考えや解決策が生まれたと感じたと考えられる。実践事例２では、構成項目に対してその事例や事例を挙げた理由に対する意見や感想を伝え合ったことで、新たな考えや解決策を見いだせたと考えられる。

一方、実践事例３では、13 ポイント減少した。推論の対象がそれぞれの興味で選んだ科学技術だったが、話合いよりも自分たちで調べてまとめ上げたことによって新たな考えを得たという実感が強かったためと考えられる。

ウ　「③話合いによって新たな知識を手に入れられると思う」に対する生徒の肯定的な回答の変化

実践事例２は変化なし、実践事例１は４ポイント、実践事例３では３ポイント減少した。実践事例２では、悩み相談の回答を推こうする課題であり、自分の回答をよりよくすることはできたが、新たに何かを知る実感は得られなかったと考えられる。実践事例１では、これまでに読み取った内容から根拠を探して解答を作成する課題であり、既習内容から考えを深めることはできたが、新しい知識を得たという実感は得られなかったと考えられる。

実践事例３では、推論を立てるために調べたり、他者の発表を聞いたりして新しい知識を得られたが、話合いで新しい知識を得たという実感は得られなかったと考えられる。

エ　「④話合いの中で他人の意見を聞くことで、自分の考えが変わったり深まったりすると思う」に対する生徒の肯定的な回答の変化

実践事例１では 14 ポイント、実践事例３では２ポイント減少した。実践事例２では 18 ポイント増加した。

実践事例１の課題は多様な考えが出にくいものであり、話合いによって初めて気が付く根拠があっても、大きく考えを変えるものではなかったと考えられる。実践事例３では、①から③と同様に、推論そのものが内容の解釈を深めるに至っていなかったことが考えられる。実践事例２は、他者との対話によって推こうが進んだ実感をもったと考えられる。

(2)　仮説１に対する検証のまとめ

上記のとおり、ねらいに沿った結果とならなかった事例はあるものの、「生徒に身近で取り組む必然性のある課題を設定することにより、生徒のものの見方、感じ方、考え方を深めることができる」という仮説を含め、適切な課題の設定により、生徒を思考の深まりへと導くことができるであろうことは推察できる。

２　仮説２「思考の過程を可視化できるよう教材を工夫し、自分の思考を振り返ることで、身に付けさせたい資質・能力を効果的に育成することができる。」の検証

実践事例では、言語活動に取り組む前の考えと、言語活動の内容、言語活動後の考えを１枚の「ワークシート」に記入させた。話合いの段階で、他者の意見を聞いて考えたことを書き込み、「ワークシート」の項目に沿って自分の考えを伝えたり質問をしたりして、考えを

広げたり深めたりしている様子がうかがえた。話合いで意見を交換した後に「ワークシート」に書かれた解答は記述量の増加、使用する語句や構成の変化が見え、実践事例１と実践事例２ではアンケート結果にも表れた。このように、「ワークシート」を用いた言語活動とその振り返りにより、身に付けた資質・能力と自分の考えの広がりや深まりに対するメタ認知を促し、効果的に育成することができたといえる。

Ⅶ　今後の課題

１　課題と言語活動の設定

本研究では各実践事例において生徒にとって身近で取り組む必然性のある課題を設定し、言語活動を行ってきたが、次のような課題が明確になった。

(1)　身に付けさせたい資質・能力と単元の目標に即した課題と言語活動の設定

実践事例により、設定された課題と言語活動によって、考えの広がりや深まりの違いが生じることが分かった。全ての実践事例において肯定的な回答が増加しなかった「話合いによって新しい知識を手に入れられる」ことについては、身に付けさせたい資質・能力及び単元の目標を踏まえた言語活動の内容とともに更なる検討が必要である。

(2)　カリキュラム・マネジメントに資する、年間を通じた計画的な課題の設定

年間の指導計画で単元の目標に即した課題と言語活動を設定しているが、カリキュラム・マネジメントを踏まえた年間指導計画となっているか、改めて検討する必要がある。学校の教育活動全体の教科横断的な取組により、資質・能力がより効果的に身に付き、他教科等で活用できるようにするための年間指導計画の作成が求められる。

２　身に付けさせたい資質・能力と単元の目標及び生徒の実態に即した「ワークシート」の検討

実践事例３において、「ワークシート」が推論を立てるための内容に焦点化されたため、生徒は言語活動による変容を振り返って評価につなげることができなかった。目的や生徒の状況によって、ワークシートには様々な役割がある。そのため、単元で身に付けさせたい資質・能力を明確にし、１枚のシートで表現できる「ワークシート」について、項目や構成などをさらに検討し、評価と指導の一体化を図っていくことが課題である。

３　国語科の果たす役割

これまでも言語活動の充実に向けて国語科が中核的な役割を担ってきた。新しい高等学校学習指導要領において、育成を目指す資質・能力が教科横断的な視点に基づき育成されることが望まれている。今後は学校の教育活動全体を通して育成すべき資質･能力を育むために、国語科は基盤となる言語能力の育成に向けた中核的な役割を担っている。

本研究では、これらの現状を踏まえた実現可能な授業モデルとして、生徒の実態に応じた話合いを設定し､言語活動によって考えを広げたり､深めたりする実践の検証を行ってきた。国語科教員が主体的に言語活動の授業実践に取り組み、その普及に努めることで学校教育全体を通して育成すべき「資質・能力」を育むことができると考える。我々は、その責務を自覚し、絶えず研修と実践に取り組み、「主体的・対話的で深い学び」を実現していく。

平成 31 年度(2019 年度)　教育研究員名簿

高等学校・国語

学　校　名	職　名	氏　名
東京都立一橋高等学校	主任教諭	◎藤原　愛
東京都立竹台高等学校	教　諭	金子昂平
東京都立浅草高等学校	教　諭	山口拓生
東京都立大泉桜高等学校	教　諭	中島大地
東京都立中野工業高等学校	主任教諭	馬場智子
東京都立南多摩中等教育学校	主任教諭	小野寺　亜希子

◎　世話人

〔担当〕東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事　　松井　水穂

平成 31 年度(2019 年度)

教育研究員研究報告書
高等学校・国語

令和２年３月

編　　集　東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　　（０３）５３２０―６８４９